

人が表現するということ 杉本志乃 一般社団法人 Arts and Creative Mind 代表/ACM Gallery ディレクター

私はいま自分の中に、揺れとその先にほのかに見えてきた動かない光の両方を抱えて、この展覧会を迎えている。「現代美術の先にあるもの」やや挑発的なニュアンスのサブタイトルは、この分野の作品がいまお既存の美術のメインストリームから排除され続けていることへの、私のささやかな抵抗だ。そこから始まったこの展覧会の企画は、しかし、滋賀県南部にあるいくつかの福祉施設を訪れるうちに徐々に変わっていった。長年手をかけ、守り続けて来た先人たちの息づかいが感じられるからだろうか。各施設の静かな佇まいにはどこかほっとさせられる。私は、この山里に吸い寄せられるように何度も訪ね、そして多くのことを学び、考えさせられた。

福祉の父と呼ばれる糸賀一雄は1946年、戦後の荒廃した日本で、行き場のない戦争孤児や知的障害のある子供たちが安心して暮らせる場として「近江学園」を開いた。その創設メンバーの一人だった田村一二は1961年に主に年長者のための施設として「一麦寮」を開き、極端に社会性に乏しかった子供達の精神の安定に、粘土で遊ぶことが効果があることを見出した。隣接する信楽は古くからの焼き物の地であり、良質の粘土が容易に手に入る。粘土という素材は、身体にかなり重度の障がいのある人にとっても、工夫次第で表現の手段となり得る。施設がこの場所に置かれたことは天の配剤とも言えるが、それとても先駆者達の並々ならぬ努力があったからこそのことだったと思う。粘土という媒体を通して、彼らの命を紡ぐような作品からは、常人がどんなに手を尽くしても吐かない何かか溢れている。後に、こうした粘土活動の副産物として生み出された作品が、前衛陶芸家八木一夫をはじめ、岡本太郎、井上一ら芸術家の目にとまり、1981年から京都市美術館で『土と色』展が始まった。そして、現在までに16回を数える。

これに先立ち、田村一二らが、近江学園から重度の知的障害児のために施設を独立させ1950年に開設したのが「落穂寮」だ。ここでは、主にクレヨンによる絵画制作を始めた。当初はあくまでも子供達のしつけや教育の一環として取り入れられたもので、絵画制作そのものを目的とするものではなかった。子供達にとっても初めてのことで、最初はほとんどの者が書き殴りの域を出ず、集中してられる時間もごく短かった。だが、先生たちの根気強い励ましによって、次第に描

くことに喜びを感じ、自ら進んで画面に向かうようになってと言う。そして一部の作品が、その構図の大胆さや色彩の深さといった美的観点において高く評価され、東京で大規模な展覧会が催された。この展覧会を見た当時の美術出版社社長大下正男の指示で、1955年に「美術手帖 臨時増刊 ちえのおくれた子らの作品」が出版されている。

しかし、主催者側の福祉関係者の最大の関心事は、作品の美的評価ではなかった。偏見の対象であった精神薄弱児が、教育的指導によっては進歩する存在であることを世に知らしめ、世の中の偏見をなくしていこうという福祉的な啓蒙活動だったのだ。以来、日本国内では、障がいのある作家の表現は、美術としてはなかなか正当に評価されず、一種特殊な世界の表現物として捉えられ、今日に至ると言っても良いだろう。当展覧会では、この時代の一連の営みを、この分野のルーツと考え、当時の作品を借り展示している。

現在は、全国の多くの障害者施設で、絵画制作をはじめとした様々な造形活動が取り入れられている。以前と違い、作者それぞれの自由な発想や、技術面でも彼ら自身の工夫や独自性を大切に、特別な指導をすることは避けられるのが通常だ。その結果、思いも寄らない多様な表現が日々全国で生まれている。私は全国各地の施設を訪ね、障がいのある表現者の作品をできる限り丁寧に見、今回の展覧会のための作品を選んだ。

商業的な側面から美術に関わってきた私は、昨今の美術品価格の異常なまでの高騰や狂騒とも言える状況にずっと懐疑的であったが、それでもやはり、彼らの作品の一部については、美術品として価値付けを図ることは必要と考えている。それは、歴史的にみても、適正な価格をつけて流通させることが、将来を見据えた作品の保全とこの分野における造形活動の継続につながるという視点からだ。しかし、展覧会準備のための旅で出会った施設の職員の人たちの、障がいのある表現者への深い愛情と、作品に対する慎重な姿勢に触れ、私の心は揺れている。作品の美術的価値などよりも、ただそこにあるかけがえのない存在の痕跡として、生み出された創作物を大切に思う気持ちが現場には溢れていた。一方で、作品が美術品として、福祉を離れた場所に展示されることで、当人やご両親がとても喜ぶ姿も、私は数多く目の当たりにしてき

た。この人たちにとって、それは現実社会との接続を意味し、障がいのある息子や娘が正しくその存在を認められ、必要とされていることを、素直に嬉しく感じていることが伝わってくる。さらに言うと、評価を避けることは、本当に才能のある作家の芽を摘んでしまうことにもなりかねない。やはり個別の作品について美術的評価を求めることは、一つの方向として模索されていいと思う。

かつて私は、コンセプチュアルな現代アートの世界に憧れ、この世界を志した。私にとっての現代アートとは、世界が直面する社会状況に対する批判がその重要な役割のひとつであり、私たちに問題意識や新たな視点を提示してくれるものだ。一流のアーティストが生み出した優れた作品は、私たちの想像力を喚起し、固定概念を覆す力強さに満ちている。ダイナミックな世界のアートワールドは魅力的だし、それを否定するつもりもない。でも、その頂を意識しすぎて、本質的なことを見誤ってはいけないと思う。おそらくラスコーの洞窟壁画以来、知識や論理とは違う次元で生み出される芸術がある。「なかよし窯」の池谷正晴先生の言葉を借りれば、「彼らはね、頭で作っとるんじゃないです。体で作っとる」。「なかよし窯」は、畦道を抜けて、林の中の細い道をくねくねと登った先の、田んぼを見下ろす小高い丘の上にあった。錆びついたトタンと廃材のような木材で、かろうじて雨風が凌げるのだろうか。土間に粗末な作業台が置かれ、奥には穴窯がある。ここで澤田真一さんと池谷先生が週3回、10時から15時までの制作時間を共に過ごす。冬はさぞかし寒かろうとか、夏は暑かろうとか、俗人の私はそうしたことが頭をよぎるが、こうして、周囲の自然と人間が無理なく溶け合う場所だからこそ、山の神々は彼らを祝福し、あの奇跡のような作品が生まれるのだろうか。

杉本志乃 略歴

アートコンサルタント。大学卒業後ニューヨークFITを経て渡英しロンドンサザビーズ コンテンポラリーアート及びデコラティブアートコース修了。近現代美術画廊勤務を経て、2009年株式会社 FOSTER 代表取締役就任。美術品販売及び利用に関するコンサルティング業務を行う。2015年初の知的障がい者による展覧会を企画。2017年3月表参道 GYRE にて、優れた作品をアート作品としてマーケットにつなげる目的で『アール・ブリュット?アウトサイダーアート?それとも?そこにある価値』展を開催、好評を博す。2017年日本財団主催「障がい者芸術フォーラム」パネリスト。調布市文化コミュニティ振興財団「アール・ブリュットへようこそ」講師。2018年3月一般社団法人 Arts and Creative Mind を設立し代表理事に就任。同年6月クラウドファンディングを実施し128名からの支援を受け、東京恵比寿に障がいのあるアーティストの作品を常設展示する ACM Gallery をオープン。

ここには世の中がどう変わろうと、ひたすら無心に創作することへの喜びがあるだけだ。彼らの生み出す作品からは、生命の輝きのようなものを感じ、私自身が忘れかけていた身体性が戻ってくる感じがする。彼らが創作する姿を見ると、人間は表現する生き物なのだということを、一層強く思う。理性や論理を超えて人が表現すること。それは極めて個人的なことであり、一障害者の造形から何が出てくるか表現されるかは、ひとえにその人の身体性によるということなのだろうか。それは現代アートと異なり論理や説明を拒むかのようでもあり、その先にある詩的な領域へと私たちを誘う。人が表現するとは何か。欲張り過ぎかもしれないが、この展覧会が、芸術が存在することの意味、ひいては生きることそのものについて考える機会を提供できたなら。これは滋賀の山里に通ううちに私の身のうちに生まれてきた願望である。

最後に、この場をお借りして、私と滋賀の施設の人たちとの縁をとりもって頂いた服部正先生、度重なる訪問と様々なお願いにいつも快く応じてくださった落穂寮の山下陽一先生、長いインタビューを受け入れ貴重なお話をお聞かせくださったなかよし窯の池谷正晴先生に、あらためて心からの御礼を申し上げます。個人的なことになるが、脳に重い障害を負う兄の就学のために奔走した亡き父、そして、兄を社会の中で孤立させず、臆せず笑顔で散歩に連れ出していた母の姿を忘れず、糸賀一雄が言うように障がいのある作家たちが全身から放つ光を頼りにしながら、これからもこの道を歩み続けよう。この展覧会を開くにあたり、私はあらためてこう誓った。彼らの表現は、私たち誰も心を揺さぶり、きっとあたたかい目を育てる。それこそが、今そしてこれからの芸術の大切な役割であると、私は固く信じている。